

遠位前大脳動脈瘤に対する塞栓術の有用性

Endovascular coil embolizations of distal anterior cerebral artery aneurysms

赤路 和則¹⁾ 吉田 啓佑¹⁾ 堀越 知²⁾ 木幡 一磨²⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 脳神経外科

2) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 脳卒中科

〔目的〕遠位前大脳動脈瘤に対する瘤内塞栓術は、microcatheter の進入経路が長く屈曲しているため catheter control が困難であること、親血管が細いため coil が親血管に露出しやすいこと、開頭 clipping 術が困難ではない症例も多いことから良い適応かどうかは疑問である。当院の治療経験より、遠位前大脳動脈瘤に対する瘤内塞栓術の有用性を検討した。

〔方法〕当院で 2001 年 11 月から 2020 年 12 月までに瘤内塞栓術を施行した遠位前大脳動脈瘤 32 例 36 手術を対象とした。破裂性瘤 17 例 20 手術、未破裂瘤 15 例 16 手術であった。年齢は 42 歳から 80 歳、男性 12 例、女性 20 例であり、瘤の最大径は 2.6mm から 11.5mm であった。

〔成績〕塞栓術手技は distal access catheter 使用 30 例、Neuroform Atlas 使用 1 例、double catheter technique 1 例、catheter assist technique 1 例であり、balloon assist technique 例はなかった。27 例で Echelon10 を使用していた。手技に伴う永続性合併症はなかった。未破裂瘤 14 例で 3 ヶ月後 mRS が 0、内頸動脈瘤破裂による SAH に伴った未破裂瘤の 1 例で 3 ヶ月後 mRS が 1 であった。破裂瘤入院時 WFNS Grade1-4 の 10 例中、3 ヶ月後 mRS0 が 7 例、mRS1 が 3 例であった。入院時 WFNS Grade5 の 7 例中、3 ヶ月後 mRS0 が 1 例、mRS1 が 1 例、mRS3 が 2 例、mRS5 が 1 例、mRS6 が 2 例であった。36 手術の術直後 DSA 所見は、12 例で complete occlusion、22 例で neck remnant、2 例で body filling であった。術後破裂はなく、4 例で再発を認め、再塞栓術を行った。最終 MRA 所見は、30 例中 14 例で complete occlusion、16 例で neck remnant であった。

〔結論〕当院における遠位前大脳動脈瘤に対する瘤内塞栓術では、再発例もあるが、術後破裂や手技に伴う永続性合併症はなかった。未破裂瘤例や破裂瘤入院時 WFNS Grade1-4 例では 3 ヶ月後 mRS0-1 であり、治療成績良好であった。遠位前大脳動脈瘤に対する瘤内塞栓術は有用であると考えられた。